今こそつながろう地域の和（わ）

ー障がいのある人もない人も互いを尊重し、支えあい共に暮らすまち守口の実現に向けてー

「笑顔のあるところから人はつながっていくと思っていて、毎年笑顔の咲くようなイベントにしたい」と、毎年恒例の地域イベント「ふれあい祭り」の意気込みを話してくれたのは、障がい福祉事業を展開するオールケア守口の社長　吉田広美さん。

今年は第14回目になり市民協働事業としては初の開催となりました。開催にあたり、コロナ禍であっても、〝やらない、できない〟ではなく、〝どうすればできるのか〟を考えて昨年初めてのリモート開催をし、今年も〝誰も一人にしない、こんなときこそ明るく元気にみんなで乗り切っていきたい〟との思いから、同様にリモートでたくさんの人の協力を経て開催することができました。

祭りの雰囲気を感じてほしい

オールケア守口では、主に重症心身障がい者(児)・医療的ケアの必要な方が通う通所施設です。ふれあい祭りは、「地域のお祭りに行ったことがない」という利用者がいて、それなら〝自分たちでお祭りをしよう〟ということから始まりました。

私たちにとって当たり前のことは、障がいのある人、その家族にとって、当たり前ではありません。利用者にいろいろな経験をしてもらいたいという思いと、そんな利用者のことを地域の皆さんにも知ってほしいという思いから、毎年続けています。その中で、地域の皆さんが少しずつ参加し、同じ時間を共有することで、利用者・その家族・地域の皆さんとのコミュニケーションが自然に図られ、共に笑い、共に楽しむことのできる交流の場となっていきました。

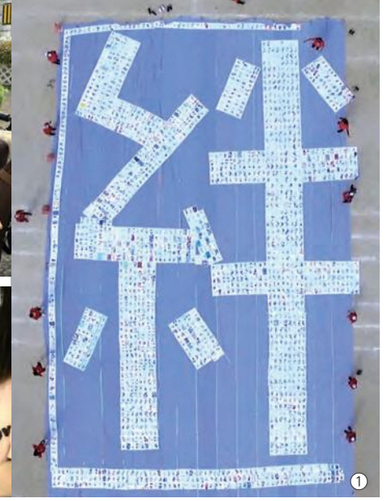
株式会社オールケア守口
代表取締役社長　吉田広美
Yoshida Hiromi

利用者さんのキラキラしている目を見たとき"私にも何かできることがないかな"と福祉の世界に興味を持ち、今に至る。

ひとつになった　絆

ふれあい祭りは、毎年交流できるイベント型で開催しています。今年はメインイベントを誰もが参加できるものとして、手形や足形などの体の一部を使った作品を一つに集め、巨大モニュメントを作りました。合計2224枚(縦25m×横15m)で完成した「絆」は、市民協働事業だからこそできたこと。たくさんの人々の協力のおかげで、教育・福祉・地域の皆さんとつながったものが形となりました。

総合司会
松本あかり（まつもと）　登尾恵（のぼりおめぐみ）



①ドローンを使って地上50mの高さから撮影。手形などは守口支援学校、よつば小学校、大久保中学校、大阪国際大学、市内事業所、公共施設などを含め、たくさんの人から届き、「絆」に完成。当日は日指しが強く、汗をぬぐいながらの作業。風も強かったため、養生テープで補強するなど苦労しました。
②～⑩各々が、思いを込めて体の一部を使ってアートに参加しました。
⑪完成した巨大モニュメント「絆」を囲みドローンに向かって手を振ります。
⑫施設内で配信を見ていると、もり吉登場。利用者さんも思わず笑顔
⑬・⑭ソーラン節のパフォーマンスに参加。法被をきてお祭り気分
※当日以外の写真については、オールケア守口からの提供

誰もが笑って暮らせる　共生社会に

障がいの有無に関わらず、必要なときに必要な手が差し伸べられる社会になるには、人と人とのつながりを大切にし、互いを理解することから始まります。

「だからこそ福祉事業者は、そんなきっかけをつくっていくことが役割だと考えています。だれもが地域の中で、地域の一員として実感し、共に生きる社会となるようこれからも活動していきます」と吉田さん。

福祉への想いは続きます。

折り紙の手裏剣はよつば小学校校長からのプレゼント。
それを、利用者とスタッフで「絆」にしました。

みんなでつながった協働事業

協働事業とは、市民と行政が地域の公共的な課題の解決を目指し、同じ目的のために協働することで、さらなる価値や成果を生み出すことを目的としている事業です。

例年オールケア守口が実施していた「ふれあい祭り」は、昨年市民協働事業に公募され、"共に支えあうまちづくり"をテーマに、採択されました。

三者が一緒になって協議を重ねながら公共施設で手形などの募集ができたことや、さまざまな取り組みができたことは民間であるオールケア守口と共に行ったから実現できたことです。

今後も皆さんからのさまざまな協働事業の提案をお持ちしています。

ふれあい祭りの配信はこちらから

障がい福祉課
西尾浩樹（左）

コミュニティ推進課
一井麻衣（右）